



ROKKO NEWS

http://www.rokkorugby.com

特定非営利活動法人
六甲クラブ

新シーズンスタート号

日本一奪還へ For the team ～2014年・六甲ファイティングブル・谷新主将決定!～

六甲FB シーズン目標 「全国クラブ大会優勝」「日本一奪還!」

六甲クラブの「主将決定臨時総会」で、2014年度・六甲ファイティングブルの新主将が谷晋平(たに・しんぺい25歳)に決まった。
谷主将は「For the team」のスローガンで日本一奪還の目標を掲げるとともに、六甲クラブの創部以来のモットーである「楽しく強い」ラグビー展開するチーム作り
に意気込みを語った。



主将 谷 晋平

(たに しんぺい)
1989年8月8日生まれ
25歳。小学2年からラグビーを始め高槻RS↓高槻三中↓島本↓天理大。ポジションはS.H。168センチ、76キロ。

谷主将は六甲3年目。まだ25歳だが、そのラグビー人生で多くの苦勞を重ねている。日本代表・廣瀬佳司選手の出身校で知られる島本高校時代は、部員が足りず、高校最後の年は合同チームでの出場だった。天理大に進学後、同期の立川理道(現クボタ)、前田宣郎(六甲)などとともに、関西大学Aリーグ連覇や大学選手権準優勝に貢献した。チーム内では名門高出身のライバルたちと激しいポジション争いの中で、あと一歩でレギュラー獲得の時にケガに泣いた。

卒業後、六甲ファイティングブルに入り、1年目から全国メンバー入り。が確実視されていたが、大会直前の練習試合でまたもや右ひざを負傷。約8か月もラグビーができない時期が続いた。
それでも腐らずに懸命のリハビリを続け、昨季途中から見事に復帰した。また「トップリーグ」を目指して合同トライアウトや、某チームのトライアウトに参加したこともあった。こうしたラグビーに対する真摯な姿勢が仲間の信頼を呼び、新シーズンの主将を任されることになった。「嬉しさや誇りを感じると同時に、1年間しつかりやり切らねばという責任を感じました」と谷主将。3連覇の夢破れた昨季を「チームとしてまとまっていなかった」と振り返る。僕自身も一人で突っ走ってしまった感もあるし、選手一人一人のモチベーションで差があったのかなと思います。
だからこそ、今季選手に強く求めていきたいものがある。それは「悔しさを持ち続けること」。昨年の準決勝の北海道パリアンズ戦。個々の力では決して劣ってはいなかったのに敗れた。選手、スタッフ一同は、改めて悔しさとみじめさを思い知った。「あの時の悔しさを持ち続けてほしい。新人・ベテラン関係なく勝つという気持ちを持ちつつしてほしい。」
同時にラグビーを楽しむことも重要と話す。「クラブチームはラグビーが好きで入ってくる。メンバーには週末の時間を楽しんで欲しいです。シンドイ練習でもチームの雰囲気の良い練習をします。さらに試合に勝つことももっとも楽しいです。」
副将はベテランの域に入った志磨が務める。「チーム歴が長く、上下の間でも話しやすく、勝つためには何をすべきかすぐ考えている」と谷も信頼している。関学時代にもFWの中心だった若手の高橋や、ベテランになってもラグビーに取り組む姿勢が不変の大内、豪快なムードメーカーの寺田をリーダーに指名した。舩尾、由良、中西のブレイクゴーチを置いたのは、「経験も知識も豊富。若手選手もコーチとしてなら意見も聞きやすいと思いました。六甲クラブのこれからのことを考えた時に、スキル、経験などをとどんと若手に指導してほしい」とお願いしました(谷主将)。

- ### 【2014～15年度・六甲ファイティングブル・新体制】
- 主将 谷 晋平 25歳(島本高⇨天理大)
 - 副将 志磨拓也 30歳(江の川高⇨帝塚山大)
 - FWリーダー 高橋 樹 25歳(天理高⇨関学大)
 - 大内亮助 26歳(奈良・高田高⇨京産大)
 - BKリーダー 寺田幸司 30歳(江の川高⇨帝塚山大)
 - ブレイクゴーチ 舩尾敬一郎 40歳(大分舞鶴⇨専大)
 - 由良康美 37歳(啓光学園⇨帝京大)
 - 中西 圭 33歳(啓光学園⇨大体大)

谷主将は六甲3年目。まだ25歳だが、そのラグビー人生で多くの苦勞を重ねている。日本代表・廣瀬佳司選手の出身校で知られる島本高校時代は、部員が足りず、高校最後の年は合同チームでの出場だった。天理大に進学後、同期の立川理道(現クボタ)、前田宣郎(六甲)などとともに、関西大学Aリーグ連覇や大学選手権準優勝に貢献した。チーム内では名門高出身のライバルたちと激しいポジション争いの中で、あと一歩でレギュラー獲得の時にケガに泣いた。

卒業後、六甲ファイティングブルに入り、1年目から全国メンバー入り。が確実視されていたが、大会直前の練習試合でまたもや右ひざを負傷。約8か月もラグビーができない時期が続いた。
それでも腐らずに懸命のリハビリを続け、昨季途中から見事に復帰した。また「トップリーグ」を目指して合同トライアウトや、某チームのトライアウトに参加したこともあった。こうしたラグビーに対する真摯な姿勢が仲間の信頼を呼び、新シーズンの主将を任されることになった。「嬉しさや誇りを感じると同時に、1年間しつかりやり切らねばという責任を感じました」と谷主将。3連覇の夢破れた昨季を「チームとしてまとまっていなかった」と振り返る。僕自身も一人で突っ走ってしまった感もあるし、選手一人一人のモチベーションで差があったのかなと思います。
だからこそ、今季選手に強く求めていきたいものがある。それは「悔しさを持ち続けること」。昨年の準決勝の北海道パリアンズ戦。個々の力では決して劣ってはいなかったのに敗れた。選手、スタッフ一同は、改めて悔しさとみじめさを思い知った。「あの時の悔しさを持ち続けてほしい。新人・ベテラン関係なく勝つという気持ちを持ちつつしてほしい。」
同時にラグビーを楽しむことも重要と話す。「クラブチームはラグビーが好きで入ってくる。メンバーには週末の時間を楽しんで欲しいです。シンドイ練習でもチームの雰囲気の良い練習をします。さらに試合に勝つことももっとも楽しいです。」
副将はベテランの域に入った志磨が務める。「チーム歴が長く、上下の間でも話しやすく、勝つためには何をすべきかすぐ考えている」と谷も信頼している。関学時代にもFWの中心だった若手の高橋や、ベテランになってもラグビーに取り組む姿勢が不変の大内、豪快なムードメーカーの寺田をリーダーに指名した。舩尾、由良、中西のブレイクゴーチを置いたのは、「経験も知識も豊富。若手選手もコーチとしてなら意見も聞きやすいと思いました。六甲クラブのこれからのことを考えた時に、スキル、経験などをとどんと若手に指導してほしい」とお願いしました(谷主将)。

3連覇の夢散る

第21回全国クラブ大会準決勝 2月23日(日)・熊谷ラグビー場

六甲FB	22014	0000
TGPG前	1771	0000
TGPG後	1710	14
1107	3107	24
パリアンズ	17	計14

六甲ファイティングブル

第21回全国クラブ大会準決勝は、関東地方の大雪で1週間延期された2月23日、熊谷ラグビー場で行われ、3連覇を目指した六甲ファイティングブルは、北海道パリアンズに前半リードしたものの後半失速14-24で敗れ、決勝進出を逃した。

セットプレー、特にスクラムでの劣勢が大誤算だった。平均体重110キロ以上のパリアンズ1列が巨大な塊になって六甲1列に襲いかかった。それでも前半19分、L.O奥座がゴール中央に持ち込み先制トライ。その後26分にも三木がトライをあげ、14-0と、順調に得点を重ねているように見えた。

だが、同時間帯にL.O中江が負傷退場してから歯車が大きく狂いだす。31分にはパリアンズにゴール前ラインアウトからモールであっさりトライを許してしまふ。

防御での淡泊さも目立った。後半早々、自陣ゴール前の攻防。モールをまた押されてトライを許す。24分にもトライを喫し、さらに直後の26分にも連続トライ。これで完全に六甲に余裕がなくなった。あせりからミスが多くなる。攻め込んでスクラムやモールでの劣勢からくる疲勞で、FWの足が鈍く2人目が遅くなる悪循環。S.O由良も一発狙いの選択しか無くなっていく。自慢の両WTBにボールが



日本代表・五郎丸選手が熱血指導!

中高生対象に六甲ラグビークリニック開催!

つながらない。流れを変えるべく、SH谷、PRに島田を投入するが、CTB安田、FB三木と負傷退場が続き、逆転のきつかけは完全に消えた。予想しなかったノーサイド。引き揚げてくる六甲戦士表情は様々だった。涙を流すもの、呆然とするもの。現実を認識するのに多くの沈黙とため息が流れた。「勝ち続けることは難しい」とよく言われるが、それにしても2013年度の六甲は最後までどこかさが消えなかった。

爆発的な攻撃力で連覇を勝ち取った昨年からのトンガ選手2人などの多くの選手が次のステージへ飛び立ち、山下主将は「去年とは全く別のチーム。ウチはそんな風に強くない」と、メンバーに危機感を訴えていた。さらにはシーズン途中で山下主将の東京転勤があり、なかなか練習に参加できないなど、苦しい状況が重なった。覆水盆に返らず。敗れた時に初めて痛い感する失ったもの大きき。後悔がイヤというほど湧き出てくる。たかがラグビー。仕事や環境を言い訳にすればいくらでも出てくる。しかし、「チャレンジ」の意味を覚えてくれる。我々の人生をここまで切り開いてくれたのもラグビーだったはずだ。

準決勝で夢がついて、自分たちの「弱さ」にあらためて気づいた。だが、弱いからまた立ち向かえる。何かを手にしてまた立ち上がる。新シーズン、六甲ファイティングブルがまた走り出す。

7人制ラグビーの「第2回和歌山セブンズ」が3月23日、和歌山県の紀三井寺公園陸上競技場で行われた。全国大会準決勝の敗退から約1か月。即席メンバーで臨んだ大会だったが、大会キャプテンを務めた中西圭は「目標は優勝。勝ちにこだわりたい」と気合十分だった。予選3試合を危なげなく勝ち抜き、決勝は2015年わかやま国体を目標に精鋭が集められた和歌山県代表と激突した。

17で勝利し、優勝を飾った。六甲FB・三木勇太は大会MVPを獲得した。また新シーズン主将も決まっていた。大会だったが、若手を中心に六甲戦士は大躍動。中西キャプテンも「目標を達成し、2014シーズンの好スタートを切れた」と満足した表情で喜びを爆発させていた。



洗練されたクリアな味、辛口。
SUPER "DRY"
Asahi アサヒビール
お酒